

2022年1月30日（日）主日朝礼拝説教

『水が最上のぶどう酒に』井上隆晶牧師
列王記下2章19～22節、ヨハネ福音書2章1～11節

①【神の時を静かに待つ】

カナで婚礼があり、イエス様と弟子たちは宴会に招かれました。当時の結婚披露宴は七日間行われました。その婚宴の最中にぶどう酒がなくなってしまいました。母マリアはイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と相談します。マリアがぶどう酒の心配をしていることから、この婚宴が親戚の婚宴であり、彼女は接待役だったことが分かります。それに対してイエス様は「婦人よ、わたしとどんな関わりがあるのですか。わたしの時はまだ来ていません」（4節）と言われます。「婦人よ」というのは冷たい言い方のように聞こえますが、当時の言い方で「お母様」というような意味です。「私とどんな関わりがあるのですか」は「あなたはどうぞお考えであれ、私には私の考えがあります」という意味です。「わたしの時はまだ来ていません」とはどういう意味でしょう。「時」という言葉は聖書の中で何度も出てきます。ゲッセマネでイエス様は「もうこれでいい。時が来た」（マルコ14：41）といわれました。それは十字架で死ぬ時のことをいっているのですが、それだけでなく神がその栄光の姿や力を現される時だと理解していただければよいと思います。

私たちはすぐに必要が満たされることを願いますが、神には神の定めた時というものがある、私たちはその時を待たなければなりません。「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」（コヘレト3：1）のです。神の時を待つには、神を信じなければなりません。母マリアは神の時を待つことができる人でした。彼女は召し使いたちを呼んで「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」（5節）と言い、ぶどう酒を買いに行かせることもせず、宴会の世話役に相談することもせず、この問題をイエス様にお委ねして待ちました。コロナ感染者数が恐ろしい勢いで増えています。いつまで続くのだろうと思います。しかし必ず終息する「時」があります。コロナ感染症も、神の御手の中にあるのです。神を信じて委ねて待ちたいと思います。

②【水を汲むような単純な作業を繰り返し行いなさい】

宴会場にはユダヤ人が清めに用いる石の水甕が六つありました。一つの水甕は80ℓ～120ℓが入るものでした。イエス様は召し使いたちに「水がめに水をいっぱい入れなさい。」というので、彼らは甕の縁まで水を満たしました。一つの甕に2リットル入りのペットボトルだと、40本～60本です。それが6つですから240本～360本になります。水道からではなく井戸から汲むのですから何度も往復をしなければなりません。大変な重労働です。なぜイエス様は召し使いたちにこんな行動を命じられたのでしょうか。いろんな解釈がありますが、先日読んだ本の中に面白

いことが書かれていました。

この世界は神から人間への贈り物でした。神様は光、空気、水、火、動物、植物、鉱物などを人間に与えました。人間は与えられた物に手を加えて加工し、調理し、感謝して神様に献げ返すことを通して神様との交わりをしたのです。私たちは人間は、神の性質の一つである創造する力を受け継いだのです。それは他の動物にはないものです。私たちが聖餐式の時に献げるのは小麦ではなく、それに人間が手を加えたパンです。ぶどうを献げるのではなく、人間の手と労働が加わったぶどう酒を献げるのです。

●キプロスの聖レオンティはこうっています。「被造物はそれ自体によっては直接に創造者を讃えることはできません。私を通して、もろもろの天は神の栄光を高らかに宣言するのです。私を通して月は神を礼拝し、私を通して水の流れと雨は、そのしづく一つひとつが、すべての造られた物が神を礼拝し、神に栄光を帰すのです。」またデミトリイ神父はこうっています。「世界はたんに神からの贈り物ではなく、人に課せられた仕事である。」

これらのことが教えているのは、人間を含めたすべての被造物は、人間の労働によって完成されるということです。六つの水甕は、六日間で造られた世界を象徴しています。つまり人間が世界に手を加え、造り替えることで、この世を完成させるようにされたのです。それは世界だけでなく人間もそうです。人間は神の像（かたち）を持つ者として創造されましたが、それは最初から完全であったという意味ではありません。完全に向かって成長するようにプログラムされていたという事です。神の似姿（キリストの似姿）にまで成長してはじめて完成されるのです。それまで私たちは自分自身に対して手を加えなければならないのです。そのために人生の労苦と修道生活があるのです。これがなぜ、イエス様が僕たちに水を汲ませるといふ労働を命じられたのかの答えです。神が創られた水に、人間の労働の手が加わって、更にそれが神の働きによって最上の物に変容するのです。だから私たちも召し使いのように単純な作業をしなければならないのです。特に同じ動作、同じ言葉を繰り返すことは大きな実りを期待することが出来ます。スポーツのアスリートで偉大な成績を収めた人たちや、すばらしい演奏家いかに同じ動作を繰り返して練習しているかを考えてみて下さい。野球の選手のバットの素振り、お相撲さんの四股を踏むこと、なんでもそうです。信仰も同じです。信仰生活において、短い祈禱文を何度も繰り返す、しばしば十字を切る、聖餐を食べ続ける、テゼーのような短い讃美歌を歌う、これらの単純な動作と祈りを繰り返しなさいと、昔の修道士たちは勧めています。鳥は何度も羽ばたくことによって風に乗り、自由に空を飛ぶことが出来ます。私たちも同じです。単純な信仰生活、祈禱を繰り返すことによって聖霊の風に乗ることが出来るのです。

③【良いものは後から出てくる】

イエス様は「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」(2:8)と言うと、召し使いたちは水を世話役の所に運んで行きました。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をしました。聖書には、水がいつ、どのようにしてぶどう酒に変わったのかは書かれていません。書かれていないということは、それは考えなくて良いということです。大切なことは人間の知らない所で、神様はすばらしい業をして下さるといことなのです。

世話役は花婿を呼んで言いました。「誰でも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」(10節)酔っぱらうと何を食べても飲んでも感覚が麻痺しているので一緒です。だから最初に良いぶどう酒を出し、酔っぱらってから劣ったものを出すのが普通なのです。それなのに「花婿さん、あなたは良いものを後に取って置かれた、あなたはすばらしい」と世話役は言ったわけです。これは世話役の口を借りた預言です。「良いぶどう酒を今まで取って置かれました」という言葉はキリストの福音を表している言葉なのです。福音は「良い物は後から来る」と語っています。

●先日、妻が三種類の小さいケーキを買ってきてくれたのでどの種類も味わえるように分けて一緒に食べました。ふと横を見ると、二人とも同じ順番で食べているのです。つまり一番おいしいもの(好きな物)が最後になっているのです。笑ってしまいました。

そのことは植物の一生を見てもそうです。とうもろこしをみて下さい。あの太くて強く真っ直ぐに伸びた茎、青々と茂った葉、実を包んでいる何層もの皮と髭、そのすべては実をつけるためです。実を取ったらそのすべては燃やされてしまいます。実は最後に結ぶものです。

●作家の曾野綾子さんがある本の中でこんなことを書いています。

「総じて年を取るに従って、人間は重層的に、表から裏から斜めから、物事を見られるようになる。それが年と共に開発された才能である。この才能はかなり遅れて開花し、かなり年取ってもまだ延びる芽であろう。若い時には希望通りにならなかつたら人生は失敗だという明快すぎる論理が適用される。しかし中年以後は人生がどうなってもよくない面があり、どうなってもそれなりにいい面がある、という不透明な面白さが分かるようになる。」

「少年期、青年期は体の発育期、壮年と老年は精神の完成期ということです。その中でも老年期の比重は大変重いですよ。」

高齢になってから実を結び、成長して完成するという事なのです。

多くの人はこの世を誤解しています。良い物は先に与えられて、少しづつそれは減っていき、人生の終わりにはすべてを失うと思いがちですが、全くの逆です。最後に一番良い物が与えられるのです。神であるキリストは、良いものを天に取って置かれ、人間の労働が終わった後に提供されます。この良い物とは「永

遠の命、キリストの似姿、朽ちない天の宝」と呼ばれるものです。これは聖書が一貫して語っていることです。今は労働の時であって、報いの時ではないのです。永遠の命という賃金は、この世の労働が終わってから支払われます。この体に手を加え、来世ですばらしいものを受け継ぐのを楽しみにしてこの世を過ごしましょう。